Catuḥśataka-tīkā にみえる比喩

佐々木 恵 精

1. Āryadeva 作 Catuḥśataka (CŚ) に対する Candrakīrti の注釈 Catuḥśataka-tīkā (CŚT) には、その前半八章の各々の詩頌の注釈の最後にいくつかの比喩が付加されている。Candrakīrti 自身の説明によれば、それらは論師 Dharmadāsa の作ったものであるとされる¹⁾。Dharmadāsa なる人物に関しては、チベットの歴史書において閑説され四百讚を作った唯識系とみられる人物²⁾、あるいは Vi-dagdhāmukhamaṇḍana の作者とされる人物³⁾ などが該当するであろうと考えられるのみで、それ以上には明確でなく、ただ CŚT に用いられる比喩の検討からそのおおよその輪郭が窺える。この比喩による説明には、一般人のための仏道入門を示す説法部（前八章）に相応しく、日常生活にみられる事象を取り上げて適確に示すもの、あるいは古くから伝承されている故事を利用して教えに親しませるものなどが含まれている。特に「菩薩行を説く Bodhisattvacaryā-saṁdarsāna」⁴⁾ と題する第五章には、入門者に応じた利他行を示す意味から Jātaka などに伝えられる説話とみられるものが多く用いられている。

ここでは、その若干を例示して、CŚT の比喩の特長・注釈内での意味を検討することにする。

2. 第五章では、まず菩薩行の目的である仏たる状態 (saṁs rgyas űid; buddhātva) を示すが、その中で、——⁵⁾

牟尼には行なうべき事柄と行なうべきでない事柄と説くべき事柄と説くべきでない事柄とが備わっている。従つて一切知者が一切を知るものではないということに何の根拠

1) =Chos-kyi-ḥbañs; CŚT P(eking Ya-) 35a-4, D(erge Ya-) 32a-5.

2) 山口益「中観仏教論攷」(東京 昭40再), pp. 192-195.

3) V. Bhattacharya: The Catuḥśataka of Āryadeva, Calcutta 1931, p. xxiii; D. D. Kosambi, V. V. Gokhale, ed.: The Subhāṣitaratnaśoṣa (HOS 42) p. lxxxii.

4) Tib. byaṅ chub sems dpaṅi spyod pa bstan pa.

5) CŚk(ārikā), P. (Tsha-) 6b; CŚT. P. 99b, D. 91a:

/ thub la mdzad daṅ mdzad min daṅ / / gsuṅ bya gsuṅ bya min mṅah ba /
/ des na kun mkhyen kun mkhyen ni / / min źes bya ba la rgyu ci yod /

があるうか (kā. 103)。

という詩頌で、「Āgama に説かれていない (avyākṛta) 事柄があつても、仏の説法や行動には隨機性がある」ことを示して、牟尼の一切知者性が成立することを語るのであるが、これに対して無畏王子 Abhayarājakumāra の物語を比喩にあげる。——⁶⁾

例えば、無畏王子……⁷⁾の如し。すなわち、ピンピサーラ王の太子、無畏王子は、ニガンタに唆かされて、世尊にむかつて「如来は、他の人々が激怒し嫌悪し争つていて、激怒、憎悪、慢心あるいは愚かさによつて信用しなくなるでしょう、そのような他人に恥になり好ましくなく美しくない不快なことばをお語りになるのですか」と尋ねて、世尊は彼に対して「こ (の如来) の場合には、一概に (それを語るの) ではない。(相手に) 利益をなすことばを、その時時に応じて語るのである」云々と説かれた。

この物語は、所謂「無畏王子経」として伝えられるもの⁸⁾で、仏の一切知者性として仏が相手に適応した説法態度のとれるところを示すのにしばしば用いられる⁹⁾。この CŚT でも、その喩としての対応は明瞭であり、CŚ の詩頌の意味を正確に示すとともに、その権威づけともなっている。

3. 仏のこの一切知者性をさらに説明して、次に、行動の本質はその心のあり方にあるのであつて、心の状態に注意すべきことを示そうとして——¹⁰⁾

菩薩にとつては、善であれ不善であれ、すべて (の行動) が、(菩薩の) 意向に基づいて、最高善となる。というのは、その心の自在を得ているからである (kā. 105)。といつて、菩薩はたとえどんな悪行であつても人々のためならば実践するのであるという菩薩の利他行の精神を示すこの詩頌に対して、6種の喩の最後に Ghaṭīkāra 陶師の物語があげられる。——¹¹⁾

例えば、……如来への恥かしめのことばの如し。すなわち、……ガティーカーラとい

6) CŚT. P. 110a-b, D. 92a.

7) 同時にあげられる他の喩を略する。

8) M (ajjhima-) N (ikāya) II pp. 392-6 (No. 58 Abhayarājakumārasuttanta); cf. Theragāthā-A. (kā. 26ff.), Apadāna pp. 502-504.

9) cf. 十住毘婆娑論 卷11; 大正 vol. 26. p. 79b.

10) CŚk. P. 6b; CŚT. P. 101b, D. 93a:

/ bsaṃ par byañ chub sems dpaḥ la / / dge ḥam gal te mi dgeḥan ruṅ /
/ thams cad dge legs ṅid ḥgyur te / / gaṅ phyir yid deḥi dbaṅ ḥgyur phyir /

11) CŚT. P. 103a, D. 94a-b.

う陶師が、尊き師カーシャパに対して称讃申し上げる時に、ジョーティパーラという、ブラフマンの状態にある菩薩は、外教徒にありながらも、心喜んでいる5人の菩薩を守るために、大菩提の得がたくまた世尊の不可思議なることを思つて、「あの禿沙門に菩提がどうしてあろうぞ、菩提は得がたいのであるから」と語つた。

これは、Gautama 仏陀の過去世物語として伝えられるもので、Gautama 仏陀が、Kāśyapa 仏の世に、ブラフマンの息子で Jotipāla という名の人物として、Ghaṭikāra 陶師の親友であつた時の物語である¹²⁾。その主旨はこうである。――

Ghaṭikāra は、Kāśyapa 仏に熱心に帰信する俗人であつて、仏のもとに参上する時に親友 Jotipāla を誘う。しかし「どうして禿沙門に会おうぞ。」と拒まれる。それでも繰り返し執拗に誘い掛けて、やつとのことで、仏のもとに参上させて、Jotipāla も帰信する。そして、Ghaṭikāra は盲目の老父母の世話があつて在家のままであるが、Jotipāla は出家して、後に Kāśyapa 仏より、未来世に仏陀となるという予言を受ける。最後に、この Jotipāla が、今の仏陀なりという結文がある¹³⁾。

この CŚT では、Jotipāla の吐く如来蔑視のことばが、菩提への道の険しさを示し、また仏への帰依心に注意深くさせるためのものであるというところに、喩の意味があり、人々のためには悪行でも行なうという詩頌に対応していると考えられる。

4. 以上のような菩薩の意向に基づいて、菩薩行が徹底した無私の利他行にあることが示される。時には師となり時には弟子となつて人々に手を差し延べ、あるいは母が重病の子を特に心配するように、また、医師が患者に接するように、絶大な慈愛を持つて振舞いをなすのが菩薩であると述べられる。このような偉大な菩薩の行動に敬いをなし、菩薩に傾倒して努力するよう促すのがこの章の主題でもあつて――¹⁴⁾

人々のために、世界の存続する限り留まり居る場のある彼（の菩薩）に無関心である

12) MN., II. pp. 45-55 (No. 81 Ghaṭikārasutta). M(ahā-) V(astu), Snart ed. I. pp. 317-335 (Jotipālasūtra). cf. Saṃyutta N., I. pp. 35-6.

13) 「予言」は、MV のみ。CŚT にある「5人の菩薩を守るため」の句は、源の物語にはなく、その内容不明。

14) CŚk. P. 7a; CŚT. P. 109, D. 99b;

/ ḥgro la phan phyir gañ žig la / / ḥjig rten srid du gnas yod pa /
/ de laḥaṇ sor gnas dag phuṇ na / / sdaṇ la bsam thag ci žig yod /

人ですら脱落するのに、まして、激怒しているものに、いかなる淨らかな思いがあるのか (kā. 116).

と説かれる。これに対する比喩に——¹⁵⁾

例えば、……「そこには牛も羊も連れ去られている」ごとし。すなわち……ある人が象を扱っている人々に羊の群を委ねた。彼は、しばらくして来訪し、「やあ、元気ですか」と案否を尋ねた。彼らは、「私たちに安楽などどこにありませうぞ。すべての象が運び去られるほどの風雨があつたのです」と語つた。彼は「象どもについて話がこのようにまでなつているところでは、羊の群は運び去られていることであろう」と思つて、全く尋ねもしない羊の群の話にまで(心が)至り、——¹⁶⁾

「六十歳にも成長しきつた象どもが運び去られてしまうところでは、牛や羊も運び去られていると、疑いなく知るべきである」

とも語つた。

同様の gāthā を含む喩が四種あげられる中でこの喩は Mūlasarvāstivādinaya (MSV) の中にみられる gāthā を含む¹⁶⁾。

MSV では、所謂 Kuśājātaka として知られる物語¹⁷⁾の中に捜入されているもので、その前後の内容は次のようである。——Kuśa 王子が逃げ出した妻を取り戻しに出かけ、途中、ライオンを対治して人々から軍隊 (caturāṅga-balakāya) を贈られるが、帰りまでそれを人々に委ねておく。時を経て妻を連れ戻して、帰路の途中その軍を受け取ろうとする。ところが人々は(偽つて)四軍が運び去られるほどの暴風雨があつたと語る。王子は、近くに羊の群の遊ぶのを見て、この gāthā を歌い、首尾よく四軍を受け取る。——というのである。

この MSV の物語は、CŚT でのそれとは異なつている。しかしながら、「注意深くあるべし」という教訓を含む点には変らないであろう。MSV では、人々の口車に乗せられないで注意深く情況を見る Kuśa 王子を示しており、CŚT では、

15) CŚT. P. 109a-b, D. 99b-100a: 喩の提示部は gāthā (note 16.) 第4句と見られる。

16) MSV. Vaidya, ed., p. 66 kā. 85:

hastino yatra uhyante kuṅjarāḥ ṣaṣṭihāyanāḥ/
upamānena vijñeyā ūḍhās tatra gavedakāḥ //

第3句初は CŚT では、the tshom med par (=niḥsamāyena) とある。

(漢訳) 大正 vol. 24, p. 57c;

盛少狂醉象 其象被風將 況復牛羊等 心思須自知。

17) MSV., pp. 62-69; J(ātaka) No. 531; MV., II. pp. 419-496 etc. 但し、該当の gāthā は MSV のみにある。

委ねた羊の群の案否に注目しているところに、詩頌の「無関心であつてはいけない」という教訓との対比が見られる。勿論、この gāthā にまつわる源の物語は両者とは異つた(あるいは CŚV の喩に近い)説話であつたろうと想像されるが、当時の人々によく知られた説話的教訓談が、gāthā の形で伝えられて利用されていたと考えられる。

5. 菩薩に恭敬するよう促す意味で、次に菩薩の難行 duṣkara が取り上げられる。すなわち——¹⁸⁾

あらゆる生まれ (jāti) に神通が5種とも備わっている彼(の菩薩)の、劣れるものには劣れるような姿を取ること、これが最高の難行である (kā. 117)。

CŚ では、菩薩の難行とは、動物などの生まれを取つて、各々の生まれにある生きものを助け、菩提へと導びくという「神通 abhijñā」であるとされており、菩薩の実践道が、ここでも強調されているところは注視すべきであろう。CŚT の用いる比喩では、それを Jātaka 等に示される菩薩の活動としている。——¹⁹⁾

例えば、……犬の生まれの……ジャータカの如し。すなわち、菩薩が、ある時、犬たちのもとに将来起る災難を予知して、犬の胎内に宿つた。それから、彼は誕生するとすぐに森に住むことを楽しみ、常に犬たちとともに、森のある地方に留まつた。ある時、馬車を楽しんでいるある王の馬車にあつた革を犬たちが食べてしまつた。そこで、哮り立つ王は、「犬のすべてを、ここかしこで見つけ次第殺せ」と命令した。それで、菩薩は、誰にも見られないようにして王の取り巻きの群に入り込んで王座の下にもぐり込んだところで、その王に見つけられた。王は「馬車の革を食べる奴がここに来ている。やつてきたからには奴を逃がすな」と命令した。彼は言つた、「もしも私が打ちのめされるべきであれば、確かに処罰を受けましょう」と。王は言つた、「おまえが革を食べたのだから打ちのめされるべきではないか」と。彼は言つた、「王宮の人々の話を聞きなさい。畜生に生まれたものは、食べてよいものと食べてはいけないのを知りません。もし仮に、私が食べたとして、その場合でも、その番人たちの咎ではあつても、私ではありません。地方・街・村に住む(犬)たちに何の咎がありましょう。それは、ある一匹が食べたのであつても、すべての犬がではないのに、王様は、『すべてを処刑せよ』と規準も定めず命令された。だから、人々にもこれが法となるか、ならないか、もし彼

18) CŚk. 7a; CŚT. P. 110a, D. 100b:

/ gañ la skye ba thams cad du / / mñon śes lña char yañ yod pa /

/ de yi dman par dman ltaḥi dños / / ḥdī ni śin tu bya dkaḥ baḥo /

19) CŚT. P. 111a-b, D. 101a-b.

らに(法と)ならないなら、不平等ということになってしまいます」と。そこでその王は、以上のような気持を持つ人の希有なる声に歎び、犬へのこの災難もお退けになって、教えに傾倒するようにもなされた。

この物語は、Kukkura-jātaka として現存する Pāli-jātaka のそれにほぼ一致する²⁰⁾。このように「菩薩の難行」を、動物などの色々な境界に各々の姿を取つて現われ利他行に励むこととし、さらにその例証に Jātaka を示すところ²¹⁾には、Āryadeva の説法態度²²⁾を十分に受け、また実践(冥想)が仏道階梯の基礎となっていることを示すものとして意味深いものがある。

6. 以上の比喩は、典拠の明確なものだけを紹介したのであるが、この第五章には、同じく、Jātaka, Avadāna, Nikāya 等に伝承されているであろうと判断しうる物語が多く用いられている。全 25 偈に対して、40 余種の比喩があげられるうち、その 7 割が、それらに該当すると思われるのである。勿論、日常生活の身近かな事象——例えば、母の児に対する情・名医の患者に対する態度・ライオンの攻撃法等々²³⁾——も利用されるが、日常的な事象に加え、古くから伝承される説話的教訓談が活用されることから、仏道入門として、また菩薩道として、仏教の基礎となる実践道が重視されているとみられるであろう。

CST で用いる喩全体の特長を知るには、その典拠や、その用い方など、今後のさらなる検討を必要とする。

20) J., I. pp. 175-179 (No. 22).

21) ほかに、同じ kā. 117 について、Kapiñjala-jātaka (典拠不明), Śuka-j. (J. No. 255), Romaka-j. (J. No. 277) などが関説される。

22) cf. 拙稿「四百論にみられる空観への実践」印仏研 24-2.

23) kās. 109, 112, 122 などの喩。